行ひ居る有樣を其儘記し、之れに對する感想を書き列ね此等の方法につき御經驗ある師の君の御批評なり御指導を受けんことを祈りてやまず

『ピップ』の話（ヂッケンス）（三）

英文學に現はれたる子供（二十八）

岡田みつ

兵士の一隊が家の戸口に銃を下ろしたので、食卓に就いて居た一同は驚いて立ち上がつた、ジョーの妻は空手で臺所へ戻つて來て「まあ！どこへ去つてしまつたろう。…あの鍛頭は！」と云ひかけて、彼女も亦目を見張つた。先刻初めに僕に聲を掛けたのは軍曹であつたのだが、今彼は一同を見渡して手錠を差出しながら

「皆さん、御妨げをして濟みませんが、今此男の子に申しました通り（僕に何とも言はなかつたのに）私は御上の御用で追手に向つて居るので鍛冶屋さんに一寸用があるのです」。

「鍛冶屋に何の御用があるのでせう」。とジョーの妻は、自分の夫に用があるといふのが癪に障つて、さう問ひ返した。軍曹は、鍛冶屋を眼で探しあてて、ジョーに向つて、

「鍛冶屋さんかういふ譯なのだ、この手錠が工合が惡くて、よくキチンとならないのさ。今すぐ入用なのだが、一寸調べて見て呉れませんか」。と言つた。ジョーは見て、之を繕ふには新に火を起こして、かゝらなければならないから先

二時間位暇がいると答へた。

「さうかな！では直ぐとやつて呉れませんか、御上の用なのだから」。と軍曹は言ひ捨てゝ、部下の兵士を皆臺所へ入れと命じた。此問答中、僕は心配で堪らなかつたが、手錠は僕に篏める爲でないといふ事と、此騒ぎで饅頭の事も忘れられて居るといふ事が、分つて、やう〳〵少し氣が落付いて來た。

「何時ごろですかな」。と軍曹が訊いた。二時半だと誰か答へたので、軍曹は考へながら、

「困る事もないな。此處で二時間取られても未だ宜い。此處から沼地までざつと幾哩ですか？一哩以上といふ事はありますまい？」

「丁度一哩です」。と僕の姉が答へた。

「では丁度宜い。日の暮れ方に四方から取圍む事になる。日沒前にといふ命令だから、宜し宜し」。

「四人ですか」。と客の一人が訊いた。

「え、二人。沼地に入つて居るといふ事が知れて居るのですが、日が暮れなくては、彼奴等は抜け出しはしますまい。誰か見掛けた人でもありますか」。と軍曹が言つた。僕の外皆「いゝえ」と答へた。僕の事なんぞ誰も考に入れてゐるものは無かつた。

ジョーは仕事着に着換へて、工場に入つた。一人の兵士が窓を開けると、一人が火を起こし、又一人が鞴に手を出し餘のものは火の周圍に立つてジョーがトンカン〳〵やるのを見物した。やがて仕事が終つだ。ジョーは着物を換へてから、兵隊さんの後に隨いて生捕りの場を見やうと、思ひ切つて言ひ出した。御客の一人が、ジョーが行くならば行かうと答へた。ジョーは行く氣があるがもし妻さへ同意ならば、ビッブも連れて行くと言つた。姉は僕に行つても可いと言ひさうもなかつたのだが、大分、好奇心が出て、この事件の成行きが知りたかつたので、次のやうに答へた。

「其子の頭が鐵砲で粉微塵に成つたッて、私に以前通にして呉れとさへ言はなければ。」

軍曹は別れを告げた。兵士は銃を持つて歩き出した。ヲブスルさんとジョーと僕とは、必ず後ろに居るやうに、而して沼地へ着いてからは物を言つてはならぬと嚴重に言ひ渡された。寒い風に吹かれながら、目的地の方へどん〳〵進む途中、僕は御上には濟まないが、「ね、囚人が見付からないといゝねと」。ジョーに囁いた。ジョーは「逃げ了せる事は、先無かろうよ」。と囁きかへした。

彌次馬は途中一人も加はらなかつた。寒さは烈しいし、雨模樣ではあるし、路も惡く、日は暮れかゝるのであるから、大概の人は戸内の爐火に當つて、今日の御祝をして居た。二三人燈火の輝いてゐる窓から顏を出したものもあつたが、外へ出て來る者はなかつた。一行は、眞直に墓場を指して進んだ。此處で一寸停つて軍曹は二三の兵を出して、墓場の内外を探索させたが、目指すものは居なかつたので、こんどは沼地へと向つた。霧が風に連れて音を立てゝ降りだした。ジョーは、僕を背負ふて呉れた。

いよ〳〵淋しい原へ差し掛つて來た。僕が八時間ばかり前に此處へ來て、二人囚人が居るのを見たのであるから、萬一、彼等を見付けたらば、僕が兵士達を案内して來たものと、あの囚人達は思ひはせぬだろうかと考へた。一人の囚人は、僕に向つて「貴樣は虚言者ではないか」。と訊いたが、彼は僕が裏切りをしたと思ふだろうか、併しいくら心配したつてもう追つ着くものではなかつた。僕自身がジョーの背中に居て、而してそのジョーが獵犬よろしくの風でせつせ〳〵と早足で行くし兵士は兵士で、前方で、間隔を廣く取つて、開展して居るのであるから。霧が未だ下りないのか、其とも風が吹き散らしたのか、入り日の赤い光りを受けて、燈臺も、絞首臺も、砲臺の堤も、河の向ひ岸までも、ドンヨリした色ながら、明瞭と見

ゐて居た。

僕は、胸をドキ〳〵させながら、四人らしいものが居るかと見渡した。目に入るものも、耳に聞こえるものもない、不圖、鑢のゴシ〳〵といふ音が聞こえるやうな氣がしてギョッ！としたが、それは羊の鈴であつた。羊は食べるのを止めて、怖さうに我々一行を見て居た。牛は風や霙から頭をそ向けて怒つたやうに我々を見詰めて居た。その他には、沼地の佗しい靜寞を破るものはなかつた。

兵士は、古砲臺の方向へと歩を進めて居たが、急に立ち止まつた。風に雨に連れて一聲叫んだ音が響いて來た。もう一聲聞こえた。未だ隔りはあるがその叫聲は東の方にあたつて高い長い響であつた。しかしその響は二種類混つた同時に出されるのらしかつた。軍曹は、決斷の速い人で、忽ちに考を定めて、今の叫びに答はせぬ事、進む方向を轉ずる事、驅足で行く事、との命を下した。そこで一同は右に斜に道を取つた。ジョーは跳ねるやうに行くので、僕は力一杯でジョーに摑まつて居た。

ほんとに驅け足であつた。土手を下り土手を登り、門を越え、葦の間をくゞり、處嫌はず走るのであつた。叫び聲の方へ近づくに從つて、一人の人の聲でない事はだん〳〵分つて來た。時には音がしなくなる事もあつた。すると兵士も歩を停めた。又音がすると、兵士は更に歩を早めるのであつた。愈々それに近づくと甲の聲が「人殺し！」と怒鳴ると乙の聲が四人！　逃亡者だ！　番兵！　逃亡した四人は此處に居る！」と叫ぶ。さうかと思ふと聲の主は奮鬪して息も出來ないで居るらしく又間を置いて再び、怒鳴り出すのであつた。兵士等も、ジョーも鹿の如くに跳んで行つた。軍曹が眞先に二人兵士が續いた。皆銃を上向けて走つた。

「此處に二人居る！」と軍曹は溝の底で組打をしながら叫むだ。「御用だ！二人とも！獸見たやう

な！離れろ〳〵！水が撥かる、泥が飛ぶ、暴言が吐かれる、拳が揮はれるといふ騒ぎなので、新手が二三人溝に降りて、軍曹を助け、やう〳〵二人の囚人を別々に曳摺り出した。一人は僕の知り合ひのあの囚人で、も一人のは、一寸見た方のであつた、二人とも、出血して、息を切らせて、呪ひあつて、跪いて居た。僕の囚人は、袖で顔の血を拭ひながら「覺えて居て下さい。私が此奴を捕へたンです。私があなたの此奴を御引渡し申すのですよく覺えてゐて下さい」。言つた。

「如何でもいゝではないか。貴樣だつて同樣の身の上だもの、そんな事を言つたつて、何の利益にもなるまいこら手錠を。」と軍曹がいつた。「自分の利益になるなんと思ひやしません。が私が彼奴を捕へたので、彼奴がその點を承知してゐれば、それで滿足なんです。」と笑つて居た。

もう一人の囚人は、顔が青黑くて、以前の左頰の傷に加へて、今は顔中、處嫌はず擦り傷だらけになつて居た。物も言へぬ程息をはずませて而して人に倚り掛つてやう〳〵立つて居た。

「御注意を願ひます。彼の男が私を殺さうとしたのですから。」と彼は言つた。僕の囚人は嘲りの調子で。

「殺さうとした？フーン、殺さうとしたのか。己れは貴樣を捕へて引渡したンだ。それが己の爲した事だ！此沼地から逃げないやうに、こゝへ引摺つて來たんだ、己の御蔭で古船へ歸へるのだ。殺すなんて。もとの處へ曳ずり歸す方が萬倍の苦みを貴樣にさせられるのになんで殺したりするものか」。

もう一人の方は、喘ぎ〳〵、

「私を殺……さう……と……したんです……證人になつて……下さい。」といつた。

「そんな問答はも澤山だ。炬火をつけ」と軍曹が言つた。

一人の兵士がその用意に取掛つた。僕は、疾く

にジョーの背中から降りて、身動きもしないで居たのだが、此際、僕の囚人は、四邊を見廻はして始めて、僕を見た。僕も熟と彼を見て、手を少し動かしながら首を振つて見せた。彼が僕を見るのを待ち構へて居て、僕が此事件に無關係だとの意を知らせたい、と考へて居たのであるが、彼は僕の意味が解つたのだか如何だか、妙な顏をして見せた。而してその顏付も一寸の間であつた。

炬火が四五本點ぜられ、いよ〳〵出立といふ際になつて、四人の兵士が、一齊に、三回發砲したすると後部の方にも、河の向岸にも、炬火が見え初めた。

「可し、進め！」と軍曹が言つた。

二人の囚人は、別々に、護衞の兵に圍まれて歩いた。僕はジョーに手を曳かれて、最後までも見る覺悟で隨いて行つた。炬火の火で、四邊が暖いので囚人等は、銃に取圍まれて跛引きながらも、嬉しがつて居るらしかつた。二人とも、足が惡いので早く歩く事が出來ず、疲勞も烈しかつたので、途中二三回止むを得ず休息させられた。

一時間ばかり歩いて、やう〳〵粗造の小屋へ着いた。番兵か一人居て誰何した。軍曹が答へをしたので、一同小屋へ入つた。中に、三四名の兵士がゴロ〳〵して居たが、我々を見ても珍らしくもないといふ風情で直く倒れて寢てしまつた。軍曹が報告らしいものを帳簿に書き付けて、それから、僕の知らぬ方の囚人が、番兵に伴はれて、先へ、古船へ連れ戻されていつた。

僕の囚人は、あの時以來僕を見なかつた。小屋の中に居る間、彼は爐火に暖まりながら、物思ひに耽つて居る樣であつたが、急に軍曹に對つて、

「逃亡した事について、申上げたい事があります。私の御蔭で疑を受ける人があるといけませんから」と言つた。

軍曹は腕組をしながら冷かに彼を見て、

「言ひたい事があるなら言つても差支ないが、

此處で言ふにも當るまい。事が落着するまでには、言ふ機會も聞く機會も澤山あるのは分つて居るだらう」。

「分つて居りますが、其とは別の事なのです。人は餓死するなんて事は出來ません、……兎に角私にや出來ません。それで私は向ふの村で食物を少し貰つたンです」。

「盗んだンだな」。と軍曹が言つた。

「何處から取つたか、申し上げます。鍛冶屋の家からです」。

「さうか」と軍曹はジョーを見た。

「どうだい、ビッブ」とジョーは僕を見た。

「寄せ集めものでした……その食物ッていふのは。それに飲物が少量と饅頭と。」

「君の宅で饅頭なんかゝ紛失しましたかね」。と軍曹が親しげに問ふた。

「丁度貴君が宅へ入つて御出なすつた時、妻が紛失したと言つて居る處でした。ね、ビッブ」。

囚人は、不興味にジョーを見、而して、少しも僕を見ないで、あなたが鍛冶屋ですか。あなたの宅のパイを食べて濟みません」。と言つた。

「一向構ひませんとも……私の品物なら……」

と一寸妻の事を考へてさう言つて置いて「あンたがどんな惡い事をしたのか知らないが、まさか、餓死させたくはないからな……御氣の毒な……さうだねビッブ」。

囚人の咽喉がまたカチッと鳴つたと思つたら、彼は脊を向けてしまつた。小舟が戻つて來て番兵の支度も出來たので、皆で囚人に隨いて渡し場へ行つて、彼が小舟へ乘り込むのを見た。船頭等も同じく囚人共であつたが、この連れ戻される男を見て、驚くものも喜ぶものも、殘念がるものも、物言ふものも無かつた。誰かゝ犬にでもいふやうに「ソレ！」と聲を掛けると、舟が動き出した古船が炬火の光りで、黑く彼方に見えてゐた。小舟はその傍へ着くと、囚人は船側から中へと入つた。

炬火は水に落されて「シュッ！」と音を立てて消えた。

歸途に僕は眠くなつたので、ジョーは宅まで脊負つて來て呉れた。うちの臺所へ來てから、急に目が覺め、急に立たされ、急に暖かで明るく賑かなので僕は酒醉のやうに蹌踉いた。肩の邊をひどく打たれて、姉が大聲に「こんな子ッてどこにあらうと」。怒鳴つたのでハッ！と我に歸つた時は、ジョーが一坐の人に囚人が食物を盜んだと白狀をした話をし、皆が、何處から食物室へ入つたらうと評定をしてゐるところであつた。

僕は思ひも掛けず小盜みをした報を免れたが、さりとて、自分から正直に白狀しやうとも思はなかつた。姉さんに濟まないなどゝは一向思はなかつたが、ジョーには申譯なく心苦しく思つた。ジョーが、鑢がないと探して居た時などは、殊に氣になつて、此人には打明けなくては惡いなと考へた。併し、やはり默つて居た。もしジョーが僕を實際以上の惡い子供だと思ふといやだといふ念があつたので。ジョーの信用を失してしまへばこれから以後もう朋友でなくなつてしまふ彼と無言で爐火の前で對座する事になる、其が恐ろしくて白狀し得なかつた。もしも、ジョーがあの事を知れば、僕はジョーが火の傍で鬚をひねつて居る度に心の中では、僕の所行を考へて居るな、と思はずには居られまいし、又前日の食物の殘りが、食卓に出ると、ジョーが、心の中で、僕が戸棚へ盜みに入つたかもしれぬと思ふだらうと、氣を廻はして心配しないでは居られまいし。まあ一口に云へば僕は正しいと知つて居る事も實行が出來ず、惡いと知つて居る事でも爲せずに居られない卑怯者であつたのである。（續）